

『潜入捜査～美しく淫らな男たち～』

著:松雪奈々

ill:緒田涼歌

「ちょ、ちょっと、なにをするんですか……っ」

「これだけいい身体をしていて、なにもやってないってことはないだろう。剣道？ 柔道？」

カルロはこちらのとまどいなどまるで気づかぬふうに話しかけてくる。

マサが必死に手を剥がそうとしても、大きな手は胸から離れず、揉み続ける。

「あの、やめ……」

「うん？ 剣道？」

「いえ——わっ」

そのうちもう一方の腕が背中側から胸へとまわされ、後ろから抱きかかえられるような格好で両方の胸を揉まれた。

「あ、あのっ!？」

「なに？」

「あ、だ、だから、たまに筋トレしたり、ジョギングしたりしてるだけです。昔柔道を習いましたけど、最近ハマった」

ここまでされているのだから、マサもなりふりかまわず抵抗すればいいものを、つつい律儀に答えてしまう。胸を揉まれながら。

「あの、ほんとに、ふざけないでくだ——あんっ！」

男の指先が、服の上から乳首の場所を見つけだし、ピンポイントで押してきた。

思わず変な声をあげてしまって、慌(あわ)てて口を閉ざしたが遅かった。

くく、と低い笑い声が後頭部の辺りから届く。

「ここ、感じるみたいだな」

恥(はず)かしさと悔しさで顔が赤らむ。完全にからかわれている。

「いいかげんにしてくださいっ！」

背後にいる男を睨(にら)もうとして首をひねると、ヘーゼルの瞳に至近距離から見つめられていた。からかうような表情なのにまなざしは真剣で、男の色気が滲(にじ)み出していた。

まさか、本気なのか？

やばい空気を感じとり、逃げようとして前方へ重心をかけたが、後ろから抱きついてくる男の重みでうつぶせに倒れ込んでしまった。その反動で眼鏡が畳(たたみ)に転がる。

カルロに上からのしかかられている格好で、いよいよまずい事態である。

「ちょ」

気持ちは焦るのに、予想以上に力強い二の腕に拘束されて逃げられない。身を強張らせていると、男の吐息が耳(じ)朶(だ)をかすめた。

「——こういう身体ってさ、俺、ぞくぞくするほど好みなんだよな」

低く艶(つや)っぽい声が耳に吹き込まれる。

「しなやかで、色っぽい身体だ」

「な、にを、冗談」

「俺、あんたを気に入ったって言ったよな。こういう意味も含めていたんだが、気づかなかったか？」

「私は男ですよ」

「知ってる」

マサはひっそりと深呼吸し、冷静になるよう努(つと)めた。

この男、ゲイか。

ハニートラップという単語が頭に浮かぶ。敵を性的に誘惑して懐(かい)柔(じゅう)したり、行為を録画しておいてあとあと脅迫したりする、地味だが多用されるスパイの手法だ。

公安の所属となって二年になるが、この手を使う機会はなかった。いつかすることもあるかもしれないとは思っていたが、まさか男相手にトラップを仕掛けることになるとは夢にも思わなかった。

いや、この場合、こちらが仕掛けられているのだろうか。

カルロがスパイならば——、自分はゲイではないが任務のためなら譲歩しよう。しかし、ただの一般人という可能性もあるのだ。単純に枕(まくら)接(せつ)待(たい)を望んでいるだけなら断固としてお断りだ。

どうする。

「だいじょうぶ。全部俺に任せてくれればいい」

男の唇(くちびる)がうなじに押しあてられる。ほのかに鼻(び)腔(こう)をくすぐる男の匂いは最初の印象どおり野性的で危険な香りがした。

「あの、セニョール・カルロ、いや、スイニョーレ……」

「わかってる。なにも心配することはない。女なんかには興味なくなるほどいい思いをさせてやる」

胸元にあった男の手がするりと下へおりていき、マサの股(こ)間(かん)の辺りにふれた。

「あ……、や、そこは……っ」

「さわるだけ。いまはそれ以上のことはしない。気持ちよくしてやるだけだ」

低いささやきは心地よく、うっとりしそうなほどいい声だった。

股間にふれる手がゆっくりとそこをさすりはじめる。

「……っ、……」

もう一方の手がスーツの上着のなかへ忍び込み、シャツ越しに乳首をいじる。刺激で、身体がピクリと震えた。

「あ……」

どうする。どうする。

このまま流されていいのか。

そんなわけにはいかない。

ここまで来て上司に相談はできないし、するつもりもない。ここはひとまず時間を稼(と)ぐべきだろう。

「あの」

「うん？ 場所を移そうか」

「いや、その」

「なんだ？　ここでもいいのか？　この店はそういう店だったのか」

「ま、まさか。そうではなくてですね」

身じろぎして上半身をひねり、どうにか身体のあいだに隙間を作って上を見ると、男の開襟したシャツのなかから鎖(さ)骨(こつ)が覗いて見えた。それに続く太い首。その辺りからほのかな香りが漂ってくる。

「ああ、キスがほしい？」

「違いますっ」

なにか、幻惑作用のある香水でもつけているのだろうか。カルロの香りを嗅(か)いしていると、平静ではいられない気分させられた。冷静に切り返したいと思うのに、そう思えば思うほど焦りが生じて混乱する。

これぐらいのことでとり乱すだなんて。

どうかしていた。

「そうではなく、お誘いは大変嬉しいのですが、私は現在腹を壊しております、お応えすることができません。数日待っていただければ——」

苦慮した末、どうにかそこまで言ったところで男がぷつと吹きだした。

「は、腹あ？」

次いで、腹を抱えてぶははははっ、と爆笑した。妖(あや)しい雰囲気は瞬時に払(ふ)拭(しょく)される。

マサは男の下から這(は)いだし、眼鏡をかけ直すと、笑う男をとまどいながら見つめた。

「あの？」

そこまで大笑いされるようなことは言っていないはずだが、外国人の笑いのセンスはわからない。よほどツボに嵌(は)まったのか、彼の笑いはしばらく待っても収まらなかった。

「ああもう、あんた……か、かわいすぎる……」

目尻に涙まで浮かべたカルロが言う。

マサは整った顔をしているし、身体も鍛えているとはいえ骨格がたくましいわけではない。けれどもけっして女性っぽいわけではなく、比較的男らしい部類に入る。その自分のどこがかわいいというのか理解不能だったが、問題なのはそこではない。

笑いながら呟(つぶや)かれたその言葉は英語、正確には米語だった。

「どうやって断ってくるかと思ったら、腹とはな。まいった。あんた、最高……。ジョーが過保護にガードしてる理由がよくわかったわ」

ジョーという呼び名は聞いたことがある。上司の新田が外国人スパイにそう呼ばれていた。

「いったい、どういう……」

呆(ぼう)然(ぜん)と呟くと、カルロが真正面から見返してきた。例の不敵な笑みを浮かべて。

「あのさ、俺、CIAなんだわ」

「……………」

CIA。友好国アメリカの諜報機関。つまり、味方だ。

「ちょっと待ってろ。詳しいことはジョーに説明してもらおう。あんたの上司には俺から

話す」

男は目尻の涙を拭(ぬぐ)いながら、携帯電話を片手に流暢な日本語で喋りだした。

本文 p37～43 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>